シグマザース・ディザース

亜地人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

様々な生物討伐依頼を受ける地　〝ギルダーム〟　そこで最強（シグマ）と言われる二人がいた。これはそんな彼らの物語である。

ｓｓ初心者です。宜しくお願いします。

本文を見て思うことは、とにかく文が変ですｗｗｗ

読んでくださる方がいれば幸いです。

目　次

プロローグ ―――――――――――――― 1
第一章
因縁の過去へ　I ―――――――――――――― 4

プロローグ

プロローグ

俺には、憧れの人がいた……　筈だ。
そんなことを考えながら、また討伐の依頼書を見ている

空気がおいしく、自然も豊か。
生物も多数生息する森が奥手に見える場所。
人は此処を　〝ギルダーム〟　と呼ぶ。
しかし、人は誰一人住んでいない。正確には　［ギルダーム集会所］
という。
ある時は獰猛な獣　龍を。またある時は此処とは違う発展都市に
現れる機械生物を狩るという依頼を受ける場所である。その依頼を
受けに来る人々を　狩人（ハンター）と呼ぶ。
今日もギルダームは沢山のハンターたちで賑わっている。そんな
中に、ある青年二人がいた。

「しょうもねぇ依頼なら俺はヤらねぇぞ」
「ガタガタ言ってねぇで、さっさとヤッちまうぞ」
「ホイホイ」

アルティア・ファランシスタ
十七歳。面倒なことがとにかく嫌いな青年。背中には、［海滅剣カ
ルナヴァル］という大剣を背負っている。
ディルムッド・フォレスティア
アルティアと同じく十七歳。何事にも冷静な青年。背中には、父親

から受け継いだ黒と赤が特徴的な槍「真斬剣エグニール」を背負っている。
二人はとにかく喧嘩が多い。あまり広くないギルダーム内でも、互いの自慢の武器で決闘し始めるほど。
だが、一度狩りに行くとなると……。
一人はその場にあった冷静な判断をくだし、もう一人はその判断を確実に聴取し、狩りを進めていく。
そして最後は残った二人の力を出しきって……。

〝ぶった斬る!!〟

ギルダーム内では、二人を〝最強〟（シグマ）と呼ぶ。
どんなに狩り経験豊富なハンターでも、ましてやその集団でも、功名を持つ者も、自身を機械に改造した者も、
とにかくどんな誰であろうと、一つ言えることは……。

〝彼らには敵わない〟

「そんで、今日はどんな依頼なんだ？フォレス」

「あのだだっ広い平原に何かいるんだってよ。そいつを狩ってこいって」

「なにその不確定要素満載の依頼ッ！」

「まぁ待てよ。何かスゴいデカイらしいぞ。そいつ」

「なん、だと？」

「噂によると、地中を泳ぐ烏賊（イカ）か蛸（タコ）らしいぞ」

「食えるか？そいつ」

「く、食えるんじゃねぇのか？ていうか、なんで食うことしか考えてねぇんだよ!!」

「よし、行く!!」

「お前食いもんなら動くんだな」

「当ったり前だ」

「そんなことより、狩猟騎士団からのスカウトの件。お前はどうすんだ？アルティア」

「ディルは？」

「もちろん、パス」

「だよな、俺もパス」

彼らはいつでも自由を優先する。誰かの下につくということは、一切しない。

「で、受けるんだな？今日の依頼」

「あぁ」

彼らは依頼を受け、平原へ歩いていった。

第一章
因縁の過去へ　Ⅰ

一歩一歩前へ行くたび、人には試練が待っている。
怒り、憎しみ、苦しみ、悲しみ、楽しみという試練。是等全てを経験し、学び、己を高めていく。
人は是を『成長』と言う。
しかし彼らには、それが……　できなかった。

ー翌日の朝ー
二人はようやく平原に着いた。
足が全く動かなくなるほど疲れていた。

「ひとまず、休憩にするぞ」

木陰で休憩することにした。

二人が来たのは、ギルダームから東に約三〇キロメートル行った所に位置する地「ハーザルト平原」
草木は生い茂り、川の水は川底がくっきり見えるほど澄みきっている。極稀にだが、珍しい鉱石も取れるらしい。
多種多様な生物が生息するこの地で、二人はある生物の撃退を依頼された。

ー　崩極龍　　ネザドベルスー
地を泳ぎ、見た目は巨大な烏賊（いか）のような龍。　その生態は未だ謎が多く、数多の研究者たちが捕獲しようとするが、皆無惨に散っていったという。そんな龍が、こんなだだっ広い平原にいるという。

しかし、

そこには、もう姿は無くなっていた。
それもそのはずだ。　何せこの依頼を受けてから既に一日経っている。姿が無いのも当然のことだ。

「来た意味ねえじゃねえか!!?」

アルティアはキレた。

「消消消消消消消消消消消消消消消消消消消消消消消消消消消消消消消消消消消消消」

ディルはコワレた。

二人は同じことを考えた。
ーこれじゃ変われないー
これじゃまるで、、、、、
《あの日》と同じじゃないか、と

ー10年前ー
その日はこれまでにないほど、晴れていた。
二人の無邪気な少年がいた。とても仲が良い友達だった。暇があれば、何処にでも行こうとするやんちゃな二人。

「ディル　何して遊ぶ?」

「どっか行こう‼?」

相変わらずの二人だった。そんな二人には、一人ずつ、兄がいる。

「アルティア、　　また出かけるのか?あまり遅くなるなよ」

「ディルムッド　、　今日は何処に行く気だ?　」

アルティアの兄　　ギルス・ファランシスタ

ディルムッドの兄　　ベルジャック・フォレスティア

二人もまた仲が良かった。

どちらの家も、両親を早くに亡くしている。だが、生活は安定していた。二人は　狩人（ハンター）だった。それも名の知れた一流ハンターだった。依頼を受け、達成すれば、報酬金を貰うことができる。ある意味いい職場だった。　　二人は　何時しか、　〝無敗〟（カルトロシア）　と呼ばれるようになっていた。

「ギル兄‼?　　うん、早めには帰るようにする‼?」

「ベル兄さん恐いよ　　あんまり遠く行かないからさぁ」

そう言うと二人は駆け出して行った。行く場所は決まっていた。

ー　憧れの人のもとへ